

音楽やスポーツの観客が受容できる COVID-19 感染確率の計測

1220525 根井貴史

指導教員 草川孝夫

研究背景

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、多くの音楽ライブやスポーツイベントが中止となった。また、もしそれらが開催される場合であっても、ネット配信やテレビ中継のみが行われる無観客で開催されたり、観客の声出しなどが制限された形態で開催されたりした。これらの開催形態は、観客がどのような開催形態を希望するのかは考慮に入れずに、国や主催者が決めたものであった。観客の希望を考慮に入れないような判断は、非常事態下であった当時はやむを得ないものと考えられる。しかしながら、今後、開催されるイベントの開催形態として、どのようなものが望ましいかを模索する上では、観客がどのような開催形態を希望し、どの程度の感染確率ならば許容できるのかを調査した上で、判断する必要があると考えられる。

研究目的

今後開催されるイベントの開催形態としてどのようなものが望ましいのかを、観客側の希望をもとに明らかにすることが本研究の目的である。より具体的には、イベントでの声出しを認められることに対して、どの程度までの感染確率の上昇ならば観客が許容できるのかを、音楽ライブとスポーツイベントそれぞれについて明らかにすることを目的とする。

調査・分析方法

インターネット上でアンケート調査を実施した。主な調査項目は、音楽ライブ、スポーツイベントのそれぞれについて、声出しを認めた場合と認めない場合の、許容できる感染確率（イベントに参加する選択と参加しない選択が無差別になる感染確率）である。それらの感染確率を被説明変数とし、声出しの有無を主な説明変数とした回帰分析により、声出しを認めることに対して許容できる感染確率の上昇度合いを推定した。

分析結果

音楽ライブの場合もスポーツイベントの場合も、声出しを認めた場合と認めない場合で、許容できる感染確率に差は生じなかった。

考察・結論

現状では、声出しを認めることで感染確率がわずかでも上昇するのであれば、声出しは認めないままでもよい、と観客側は判断していることになる。今後、声出しを認めても感染確率が上昇しないような状況になるまでは、声出しを禁止した開催形態を続けてほしいと観客自身が望んでいることが分かった。